

分科会等

開催報告

2015年度医療福祉連携講習会に参加して

総合病院国保旭中央病院 横尾英孝



会場風景

この講習会に参加する約1年前に地域の中核病院である当院に赴任し、限られた医療資源の適切な分配や地域医療連携システムの構築をど

うするか悩んでいました。

講習会は講義、ワークショップ、実習に分かれていて、講義では様々な医療職や大学の教員、厚労省の職員などから現在の医療と福祉について知識、国の政策や制度、法律、現在に至るまでの経緯も含めて系統立てて学ぶことができました。ワークショップでは勤務先も職種も全く異なる方々と意見を出し合い、KJ法で創造的なアイデアが出てきたときの感動を今でも忘れません。一方、実習では8月の炎天下、エアコンのない家で同居人がインスリンを腕に注射し、煮込みうどんを食べる様子を見たとき、「患者は皆実際に地域で生活している人間なのだ」と実感することができました。

それからは診断書や意見書を書くときに患者の日々の生活をイメージし、必要な資源や情報、処方内容などについてよく考えるようになりました。社会的な問題を抱えている患者に対しては、実習を通して知り合った市町村の方に連絡し、速やかにご支援をいただくこともできました。

高齢化や医療費の問題など激動する時代で最適な医療を提供するためには、自分自身が世の中をよく知りネットワークを持つことが重要であると、この講習会を通して痛感しました。

2015年度医師事務作業補助者指導者養成講習会に参加して

総合南東北病院ドクターアシスタント課 筋内朋子

今回、日本医療マネジメント学会主催の医師事務作業補助者指導者養成講習会に参加しました。

医師事務作業補助者(以下、補助者)として必要な実務上の知識のみならず、「コーチング」や「メンタルヘルス」なども盛り込まれており、大変興味深い内容でした。また、講師陣はその分野に対する深い知識・経験



会場風景

を持った方々で、各分野におけるスペシャリストが担当した、大変内容の濃い講習会でした。

なお、補助者の業務としては

本来禁止されている「診療報酬」や「DRGとDPC」などについても盛り込まれており、これは、病院運営の「全体最適」に補助者が資するために必要な知識であるとの主催者側の意向によるものであり、他の講習会にはない、日本医療マネジメント学会らしさを感じる講習会でした。

参加しての感想としては、補助者の業務は、医師を通じて間接的に病院全体の業務と密接に関わっており、病院の全体像や仕組みが分からないと、真に医師を補佐することはできない、補助者の業務というのは、病院全体のマネジメントと密接に関わっていることを感じました。

日本医療マネジメント学会では、学術総会をはじめ、各都道府県の支部が中心となって支部学術集会や分科会・セミナーが多数企画されており、今後はそのような会にも積極的に参加して、医師だけからではなく、病院組織から必要とされる人材になれるように、引き続き自己研鑽を続けていきたいと思えます。

2015年度医師事務作業補助者指導者養成講習会に参加して

西淀病院医局事務課主任 松岡美樹

全26項目、4日間の講習会では、業務の課題に対する解決策の考え方や受け止め方も含め医師事務作業補助者としての勇気をいただきました。業務の構築と人材育成のワークショップでは多病院の参加者との有意義な意見交換ができました。

医療の知識も必要ではありますが、医師の近くにいる職種として、多職種との架け橋的な存在であり、もう一歩二歩も踏み出す医師事務作業補助者(以下、補助者)としての役割が求められていると感じています。

講義のなかで、「これからの補助者は書類記載や代行入力だけでなく、提案できる医師事務作業補助者へ発展していく必要がある」との言葉がありました。ただ補助者を増やして業務拡大するのではなく、どのようなアプローチをすれば、効率的な診療支援をすることができるのか、提案する力が求められるとのことでした。